新渡戸稲造賞〈最優秀賞〉

多様性と共に生きる

［テーマ①私の異文化交流体験記］

拓殖大学別科日本語教育課程
チカ・ナディヤ・マハルディカ〔インドネシア〕

「多様性の中の統一」という標語があるように、インドネシアには多くの民族、言語が存在し、さまざまな文化を持つ人々が共に生活している。そのため、異文化に触れることは特別なことではないと思われるかもしれない。しかし、私ほど多様な経験をしてきた人は、まれかもしれない。

私は幼稚園から高校までずっと田舎で暮らしていた。特に、幼稚園から中学までは、ムスリムしかいないイスラムの学校に通っていて、いつもイスラム教の人とだけ過ごしていた。高校を卒業した後、私はジャカルタの大学に進学した。ジャカルタはインドネシアの首都で、さまざまな宗教や文化の人がいる。そこで、初めて多様な人々と出会った。そして今、私は東京で留学生として生活している。

田舎から首都へ、そして自分の国から外国まで来たという体験を通して、私は「世界は広い」と気付かされた。初めの頃は、ムスリムとしか会ったことがなかったため、キリスト教のオンラインの友達にイスラム教に改宗するように言ったこともあった。しかし、私の宗教では、人に宗教を変えるように勧めることは教えられていない。それは少し恥ずかしい思い出だと思う。イスラム教はインドネシアで最も信者が多い宗教なので、その時の私は、自分の信仰に誇りを持ちながらも、異なる宗教を理解し受け入れることが難しかった。しかし、今思えば、その後違いを受け入れることの大切さに少しずつ気付き、「多様性の中の統一」という言葉の意味を理解し始めていたように思う。

私が少しずつ「多様性」に向き合うようになったのは、ジャカルタでの大学生活を通してだった。そこでは宗教だけではなく、民族、文化、価値観、言語が異なる人々とも出会った。ジャカルタは首都だが独特な言語や表現も使われていて、初耳の言葉をたくさん聞いた。しかも、私の出身地にも地域言語が存在し、その地域言語の言葉を使ってしまうと皆に「それはどういう意味？」と聞かれた。そのような質問は初めてだった。その言葉は出身地では普通に使うので、共通語だと思っていたのだが、地域言語だと気付いた。そこで、私は自分の地域の言葉を皆に紹介した。すると、たまに彼らはその言葉を使うようになった。同じ国の人の間でも言葉が通じず、紹介し合うことは不思議な経験だと思った。

初めて他の民族の人と会話するときに、時々違和感があって仲良くできないと考えたこともある。それでも、一緒に過ごす時間が増えるとともに、違和感の正体が「違い」ではなく、「知らないこと」だったことに気付いた。知らないことに戸惑い、どう接していいか分からなかっただけだった。会話を重ね、お互いの背景を理解していくうちに、少しずつ絆が生まれて、心の距離も近づいていった。今では、そうした出会いが私にとってとても大切な宝物になっている。これは、私が環境を変えたからこそ得られた大切な経験だと思う。

ジャカルタでさまざまな人と出会い、「多様性」について少しずつ学んできた私は、大学を卒業した後、今度は日本に来て、全く異なる文化の中で生活することになった。日本では留学生として日本語学校に通い、ここでもさまざまな国から来た人々と出会った。教室ではいろいろな言語が飛び交い、皆が母国の文化を紹介し合い、違う味の食べ物を試しても、それが当たり前のように感じられる。周りの皆も同じように異国の地で生活していて、お互いを尊重し合おうとする雰囲気

がある。その場所にいると、なんとなく落ち着いた気持ちになれる。

初めて少数派の立場になったため、もちろん心配なことも数多くあった。例えば、礼拝をする場所や、食べられるものなどである。しかし、学校では空いている部屋で礼拝してもかまわないと言われ、また、いくつかのイベントでは、特定の食べ物を避けている人のために配慮されたメニューが用意されることもあった。初めての国での生活で不安もあったが、思ったより早く生活になじめたのは、母国での経験によって育まれた心があったからだと思う。もちろん、それだけでなく、周りの人たちが互いの違いを受け入れてくれ、尊重し合う環境だったからこそ、穏やかな気持ちで過ごせたのだと思う。そして、もし皆が違いを理解し合い、受け入れようとする気持ちを持てば、世界はもっと平和になるのではないかと感じた。

田舎の静かな生活から、都会で多様な人々がいる町、そして外国での新しい挑戦により私の人生はさまざまなところで色づいてきた。それぞれの経験が私を少しずつ大きくし、広い目と優しい心を育ててくれた。これからも、違いを大事にしながら、たくさんの人と仲良くしていきたい。そうすることで、もっと楽しい人生になると信じている。